

当院で診断された卵巣癌、卵管癌、腹膜癌、卵巣境界悪性腫瘍患者の 予後関連バイオマーカー探索に関する研究

1. 研究の対象

1983年1月～2018年12月の間で、子宮内膜症や皮様嚢腫等の良性疾患および、卵巣癌または卵巣境界悪性腫瘍と診断した患者さんを対象とした研究です。

2. 研究目的・方法

卵巣癌、卵管癌、腹膜癌（以下卵巣癌）は、その大半がⅢ期以上で診断され、シスプラチンをはじめとした白金製剤の登場により、卵巣癌の治療成績は向上しましたが、未だに女性性器の悪性腫瘍の中でも最も予後不良な疾患です。卵巣境界悪性腫瘍は、悪性度の低い腫瘍とされており、その多くはⅠ期で診断され、転移などの頻度は少ないですが、10年以上経過してから再発することもあり、その性質は不明なところが多いのが現状です。他にも、卵巣癌の中には、卵巣子宮内膜症や皮様嚢腫等の良性の卵巣腫瘍を背景に発生するものもあり、その原因やメカニズムもよくわかっていません。一般に、卵巣癌および卵巣境界悪性腫瘍の標準治療は手術で腫瘍を除去することであり、卵巣癌の場合は、ほとんどの症例で術後化学療法が行われています。他にもお腹に溜まった水（腹水）や試験開腹術による診断を行った後に、化学療法を行った後に根治を目指すための手術を行い、さらに化学療法を行う場合もあります。最近では、卵巣癌に対する新たな治療法も登場してきており、これまでの抗がん剤とは違う作用を持つ薬剤を、従来使用されてきた化学療法に追加することで良好な治療成績が得られるようになってきました。しかしながら、卵巣癌は前述のような集学的治療に関わらず、5割以上の症例で再発し、再発後の根治治療は困難なのが現状です。そこで、当院で子宮内膜症や皮様嚢腫等の良性疾患および、卵巣癌または卵巣境界悪性腫瘍と診断した患者を対象に、採取した腫瘍の組織検体や腹水、血液の成分等の検体を用いて、特定のタンパク質に反応する試薬を用いて、その特徴を調べる免疫染色やタンパク定量等の方法を用いて、悪性腫瘍に悪性転化するメカニズム、予後や再発および化学療法に対する効果に関わるような因子を調べることにより、その特徴を明らかにして、患者さんに対する治療効果の予測や治療法の選択に寄与することを目的として本研究を行います。

3. 研究に用いる試料・情報の種類

情報：病歴、手術記録、カルテ番号 等

試料：組織検体、腹水検体、採血検体 等

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。

ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としますので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

防衛医科大学校 産科婦人科学講座

〒359-8513 埼玉県所沢市並木 3-2

電話：04-2995-1511（内線 2363）

FAX：04-2996-5213

研究責任者：防衛医科大学校 産科婦人科 講師 宮本守員

-----以上